様式２－２

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究
実施方法等

１　実践校について

実践校名	ながさきけんりつ ご とうこうとうがっこう 長崎県立五島高等学校	
学科名	生徒数（名）	学級数
普通科	４１５	１７
衛生看護科	８１	３
（全体）	４９６	２０

２　実践研究の対象

学科名	学年	生徒数（名）	学級数
普通科	２年	１４２	６
	１年	１２４	５
（全体）	―	２６６	１１

３　実践研究の実施経過

（１）概要

１年生	平成３０年　４月 ～　７月	社会（五島）を知ろう
	平成３０年　８月 ～３１年　１月	福江島のばらかもんプロジェクト
	平成３１年　１月 ～　３月	社会における課題を発見して「問い」立てる
２年生（主担当学年）	平成３０年　４月 ～　９月	社会探究型課題研究の「問い」を検証するためのアクション ・１年次（平成２９年度） 社会探究型課題研究のテーマと「問い」の決定 ・２年次（平成３０年度） その「問い」を検証するためのアクションの実践
	１０月	校内選抜大会「バラモンバトル」の開催
	１１月	校内最終発表会「バラモンプラン発表会」の開催
	１２月	修学旅行における研究についての意見交換

（２）探究についてのセミナーや表彰式等への参加

①第１回九州ＳＧＨフォーラム（平成３０年７月９日）

長崎市において、九州内のスーパー・グローバル・ハイスクール（以下、ＳＧＨ）に指定されている高校が集まる第１回九州ＳＧＨフォーラム[1]が開催され、長崎県立五島高等学校の職員２名が研修のため、参加した。長崎県立長崎東高等学校が行っている課題研究の発表会と九州内のＳＧＨ校の分科会があり、それぞれの学校が地域に入って行っている課題研究について英語で発表が行われた。各学校とも、教職員の意識が高く、グローバルな観点をしっかり持っていた。まさに、“Think Globally，Act　Locally.”を地で行く内容が多く、学ぶことが多いフォーラムであった。また、プログラムの最後に行われた各学校の代表によるパネルディスカッションでは「ＳＧＨで身につく力と将来への展望」というテーマで生徒が自分たちの意見を論理的に発表する場面があり、資質・能力の高さを垣間見ることができた。普段の活動を資質・能力の開発に生かす取組が参考になった。

②福知山公立大学 2018 地域活性化策コンテスト
「田舎力甲子園」（平成３０年７月１９日）

福知山公立大学が主催する 2018 地域活性化策コンテスト「田舎力甲子園」にエントリーし、奨励賞を受賞した[2]。受賞の対象となったのは、長崎県立五島高等学校普通科２年生の６名の生徒がバラモンプランの中で取り組んだ、ご当地グルメ「五島ピザ」の開発とその具体化、ブランディングのための提案がその主な内容である。

「五島ピザ」開発のきっかけは、地元の農家が第１次産業だけでは十分な収入を得ることができず、農家の後継

---

[1] 幹事校は、長崎県立長崎東高等学校である。

[2] 奨励賞を受賞した長崎県立五島高等学校の他に、優秀賞（２位相当）に同県立宇久高等学校、奨励賞に同県立中五島高等学校が入賞した。

者が減っている現状を知り、どうにかしなければという考えから６次産業化や地産地消により地元の第１次産業を盛り上げたいと考えたことであった。

なお、この発表会では、他校の取組を知ることができた点も有意義であった。特に、同じ長崎県の離島である宇久島の長崎県立宇久高等学校が優秀賞を受賞したことは大きな刺激となり、励みとなった。

③第７回高校生ビジネスプランコンテスト（平成３１年２月９日）

常葉（とこは）大学経営学部が主催する第７回高校生ビジネスプランコンテスト[3]にエントリーし、グランプリを受賞した。応募総数１４５件の中から常葉大学経営学部の教員による厳正な審査を経て、本校を含む９チームが一次審査を通過し、平成３１年２月９日の発表大会（最終審査）に出場し、長崎県立五島高等学校がグランプリを受賞した。

受賞したのは、福知山公立大学 2018 地域活性化策コンテスト「田舎力甲子園」に応募したときよりもバージョンアップした「五島ピザ」の開発であった。実際にグランプリを受賞した要因として、次の３点が評価された。

❶問題意識として、島内で生産されている農産物や海産物の多くが島外で加工食品等に流通されている点を主張したこと。

❷若年層への開拓を広げるためにピザの開発に注目し、チーズ以外はすべて地元の食材で賄えるように試行錯誤を繰り返し、既に試食会や商品化への検証を進め、各種メディアからも評価を受けていたこと。

❸材料を集めた「キット」として手軽に作れるように工夫し、且つ農産物や海産物の個人宅配と連携するというユニークな販路を提案していること。

[3] このコンテストは、常葉大学浜松キャンパス“トコハホール”で開催された。

今大会は、本校にとっても学びの多い発表大会となった。また、大会が終わった後のバス移動の際に、他校の生徒と連絡先を交換して、パワーポイントスライドを提供してもらうなど、主体的かつ生産性の高い活動が展開できた。

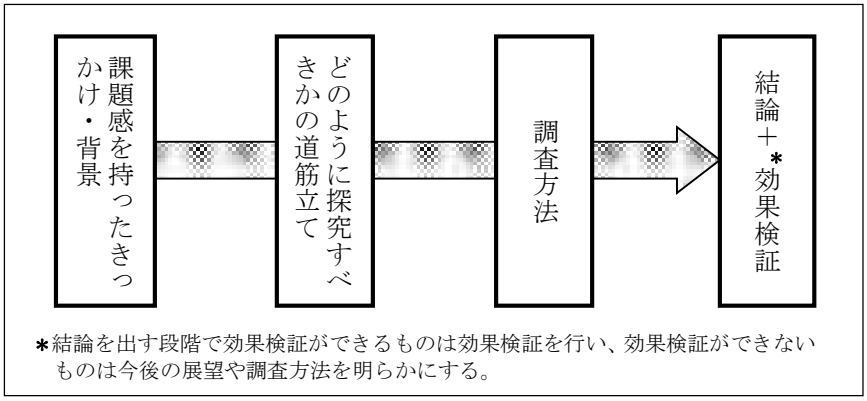
④長崎県立長崎東高等学校ＳＧＨ発表会（平成３１年２月２５日）

長崎県立五島高等学校より、教職員１名が研修のために参加した。

ア　参考となった点

(1) 研究・発表のシナリオが論理的に構成されている。

下記のシナリオが説得力をもって伝わってくる発表が多かった。



(2) 生徒自らが足を使って得てきた実感値が説得力を増している。

自分たちが得てきた声をもとに課題の要因を考察していたので、実情に沿った考察になっている。

（例１）

日本人が考える「おもてなし」と、外国人が求める「おもてなし」の違いを知るために、平和公園等の観光地で外国人観光客にインタビューを行った。

（例２）

長崎県立長崎東高等学校近くのハザードマップを作るにあたり、どのような情報があれば積極的に避難するかを知るために、学校が立地する近隣住民や町内会長、長崎在住の外国人などにインタビューを行った。

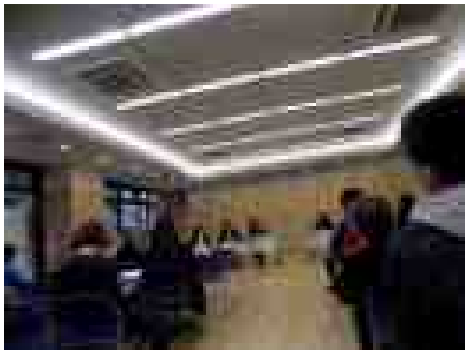
イ　講評の中で印象に残った話

ＳＧＨ運営委員の先生方による講評は参考になる話が多かったが、とりわけ山口大学の先生による講評が印象的であった。

○「Theme＝Issue」でなくてもよい。もっと“楽しい”テーマ設定でもよい。

○教育とたたら製鉄は似ている。たたらを教室に例えるならば、製鉄前の砂鉄が生徒。火を含んで砂鉄を鉄にしていく木炭が教材。ふいごが努力。「木炭（＝良い教材・学ぶ機会）を絶やさず、ふいご（努力）を踏み続けていけば、砂鉄を良質の鉄（成長した生徒）にすることができる。」

⑤「長崎のしま×ＶＲ」シンポジウム（平成３１年３月９日）



佐世保市において、佐世保工業高等専門学校主催の同シンポジウムが開催され職員２名（事務長、教諭）が参加した。

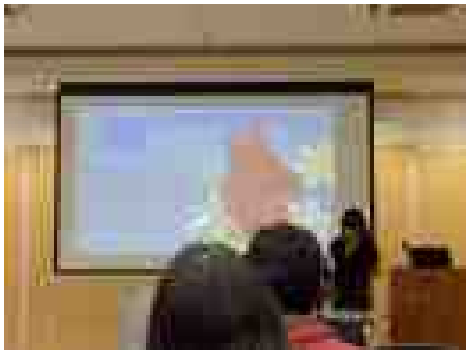
ア　「離島地区独特の困難さ解決のために長崎県のしまをＶＲ・ＩＣＴでつなげたい」

定期航路の限定、高等教育機関の不在など離島特有のインフラ課題があり、最新の科学技術等に触れる機会も少ないことが１０～２０代人口の流出に拍車をかけている。ＩＣＴによる遠隔会議、遠隔授業、ＶＲによるイベント参加などにより、物理的距離の解消を行い、今後長崎のしまにバーチャルなインフラ整備が図れないか。今回のシンポジウム発起人である佐世保高等技術専門学校の講師 槇田諭 氏の述べる「仮想的な研究教育機関の設置」が実現すれば、島を離れなくても大学と同様の教育が受けられるようになるかもしれない。

イ　「バーチャル・リアリティがつなぐミライのくらし」

株式会社エクシヴィ代表取締役社長 近藤義仁 氏によるＶＲの実演と解説があった。

〈所感〉ＶＲとグーグルマップを利用したリアリティのある世界旅行。しかも上空から鳥のように世界中のあらゆるところに降り立ち、ストリートビューで町を歩く。ＶＲを使用して絵（３Ｄ立体）を描き、３Ｄプリンターで出力して簡単に物が作れる。ＶＲの世界と現実の世界が密接になり、人の生活や物に対する意識、移動することの概念が大きく、近い未来に変わっていくと感じた。また、「リモート　博物館見学」が実際にＶＲで行われている映像紹介があったが、あたかも博物館の中を見て回っているかのようで、しかも見たいところにいくらでもフォーカスできる。まずは、離島地区の授業や会議、研修会で導入すれば、高い教育効果、経費削減効果が期待できる。ゆくゆくは、ＶＲ大学を離島に設置し、世界中の講義やイベントに参加できるようになれば、離島の未来は大きく変わると思った。



４　実践研究の実施体制

（１）本校では、総合的な学習の時間を「バラモンプラン」という名称で行っている。企画運営は「バラモンプラン運営委員会」が行う。なお、この「バラモンプラン運営委員会」は、校内の分掌、教科、学年を横断した組織とする。

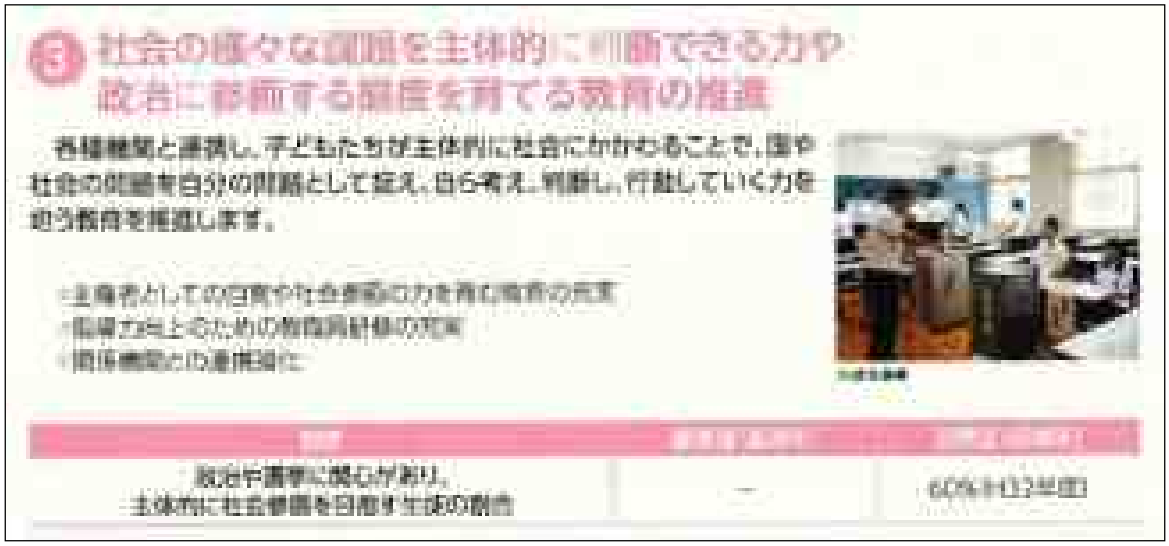
（２）定期的に「バラモンプラン運営委員会」を開き、実践研究に関する全体計画の企画立案、進捗状況の確認、反省等を行う。

（３）当該学年では定期的に学年会等を行い、実践研究に関する個別かつ具体的な計画の企画立案、進捗状況の確認、反省等を行う。

５　教育委員会等として取り組んだ内容

（１）社会の様々な課題を主体的に判断できる力や政治に参画する態度を育てる教育の推進

長崎県総合計画「チャレンジ 2020」では、「基本戦略５　次代を担う子どもを育む」において、下記の通り「社会の様々な課題を主体的に判断できる力や政治に参画する態度を育てる教育の推進」を掲げており、平成 32 年度の成果指標として「政治や選挙に関心があり、主体的に社会参画を目指す生徒の割合」を 60%としている。



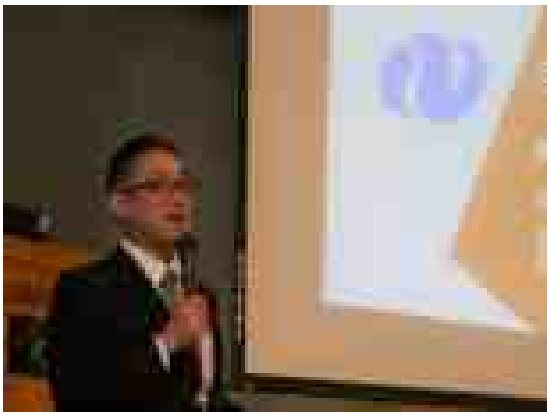
そのため、長崎県教育委員会としては、「主権者としての自覚や社会参画の力を育む教育の充実」、「指導力向上のための教職員研修の充実」、「関係機関との連携強化」等に力を入れてきた。

（２）学校に対する支援策

①実践研究の企画・運営に係る指導助言

②政治的教養教育を育む教育を推進する上で必要な地歴・公民科教員等に対する理論及び実践に係る指導助言

③県立高等学校と県関係機関との連携支援



▲バラモンプラン発表会（平成 30 年 11 月 7 日、長崎県立五島高等学校にて開催）では、長崎県教育庁高校教育課の重村係長が指導助言を行った。

（３）実践研究による成果の普及

①平成 30 年度研究指定校等に係る研究報告会の開催

平成 31 年 2 月 22 日（金）に長崎県教育センター大講堂等にて、すべての県内公立高等学校から悉皆で参加者を募り、研究成果の県内普及を主たる目的として、平成 30 年度研究指定校等に係る研究報告会を開催した。そして、本年度の研究報告会において、文部科学省委託事業「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラムに係る実践研究」の研究指定校である長崎県立五島高等学校が「グローバルな視点を持ちローカルに活躍する人材の育成に関する研究～身近

▲研究報告会における分科会のようす

▲研究報告会におけるワークショップのようす

な地域の課題から自分の将来を考えるキャリア教育及び政治的教養教育の推進～」と題して基調発表を行った。なお、本年度の研究報告会では、五島高校の発表を含めて計 14 本の発表が行われたが、参加者によるワークショップをプログラムに盛り込むなど、例年以上に成果普及を意識した取組とした[(4)]。

②長崎県独自事業への成果波及

長崎県独自事業である「次代を担う高校生の資質・能力を育成する指導改善プロジェクト[(5)]」では県立高校から３校を、「ふるさとの未来を担う高校生育成事業[(6)]」では同じく県立高校から６校をそれぞれ研究指定校とし、「実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム」の実践研究の成果を参考にして、取組を進めていきたい。

---

(4) 研究報告会後の参加者アンケートによれば、参加者にとって五島高校の取組が最も刺激となり、意欲を高める発表内容であった。また、発表を聞くだけでなく、ワークショップに参加したことにより研究報告会が参加者にとって主体的、対話的で深い学びにつながったことも参加者アンケートからうかがえた。

(5) 「次代を担う高校生の資質・能力を育成する指導改善プロジェクト」は平成 29 年度から始めた事業である。

(6) 「ふるさとの未来を担う高校生育成事業」は平成 30 年度より始めた事業である。

実社会との接点を重視した課題解決型学習プログラム（概要）

実践校名：長崎県立五島高等学校（普通科）

概要

1　研究主題
グローバルな視点を持ちローカルに活躍する人材の育成に関する研究
～身近な地域の課題から自分の将来を考えるキャリア教育及び政治的教養教育の推進～

2　社会（地域）探究型課題研究を通じて、主体性や共感性、多様性、あるいは探究力や協働力、創造力や表現力等の資質・能力を育成することを目的とした学習プログラム（通称「バラモンプラン[7]」）を開発する。

学習プログラムの目標

1　学校と社会をシームレスにつなげるようなカリキュラムを作ることで、進学した後の社会へ出たときのことを考えた資質・能力を育む。
2　自分たちの住む地域の現状を調査するところから、課題を見出し、自ら「問い」を設定できる探究力を育む。
3　「問い」に対して、自ら進んで解決を図ろうとする主体性を育む。
4　一人ではできないことを、他と協働することで解決を図る協働力と、そこでの様々な考えを受け入れる多様性を育む。
5　問題解決のために､既存値と既存値を掛け合わせて新しい発想をする創造力を育む。
6　人に知ってもらい広めるための共感性と表現力を育む。

学習プログラムの主な内容

【１年生】

1　社会（五島）を知ろう
　社会（地域）探究型課題研究を行う準備として、社会（地域）で活躍する大人の話を近くで聞く機会を作り、生徒の視野を広げる。

2　福江島のばらかもんプロジェクト
　「福江島のばらかもん[8]プロジェクト」とは、福江島で活躍している方を取材して、「福江島のばらかもん」として紹介記事を作成する活動である。取材を通して、生徒一人ひとりが地域社会との接点を主体的に作り出し、地域の魅力や課題を体験して認識する。

---

[7]「バラモン」とは、五島地方の方言で「元気な」「活発な」を意味する。
[8]「ばらかもん」とは、五島地方の方言で「すごい人」を意味する。

３　社会における課題を発見して「問い」立てる

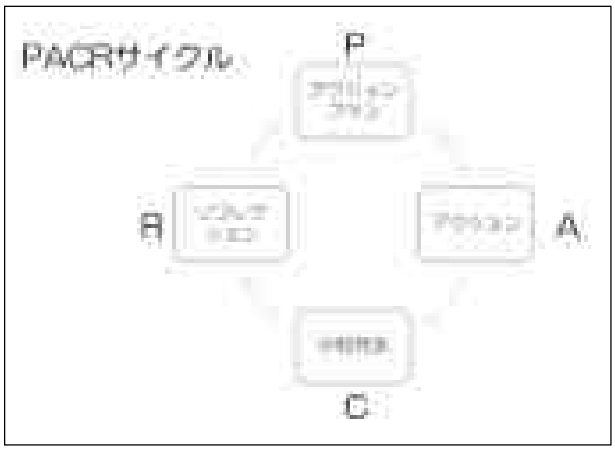
上記「２　福江島のばらかもんプロジェクト」の活動を背景に、実社会のペインポイント[9]を把握して「問い」立てる。そして、生徒自身の興味関心を主に置きながら、目的を明確にし、社会に貢献する取組を見出す。

【２年生】

１　社会探究型課題研究の「問い」を検証するアクション

自分たちで考えた「問い」をフィールドワークやインタビューを通して検証していく。それを分析し、ポスターにまとめて中間発表においてグループ内でシェアして意見をもらう。そこからリフレクションを行い、次のアクションに生かす。

このＰＡＣＲサイクルを基本とする。



２　校内選抜大会「バラモンバトル」

半年かけて検証してきた内容を 11 月に行われるバラモンプラン発表会で発表するチームを校内で選抜する。

３　校内最終発表会「バラモンプラン発表会」

最終的に 62 プロジェクトの中からバラモンバトルで選抜された８プロジェクトの発表を行う。また、他のプロジェクトはポスターセッションを行う。なお、この発表会は、ＮＰＯ法人カタリバ[10]のマイプロジェクトアワード[11]の学校大会を兼ねる。

４　報告書をまとめる

研究した内容について報告書をまとめる。

学習プログラムの成果の概要

１　生徒が実際行ったアクションから、生徒が感じたことや学んだこと

（１）地域との様々な連携事業を通じて、ふるさとの良さを改めて認識した生徒が非常に多く、将来の地域創生の担い手として成長していくことが期待される。

（２）頭で考えた仮説と実際のアクションでは現実的な差異があり、計画を変更するなど、試行錯誤するようすが多く見られた。

---

(9) 「ペインポイント」とは、「不満」や「悩み」のことを意味する。

(10) ＮＰＯ法人カタリバとは、高校生を対象に、学生ボランティアスタッフが中心となって約２時間の授業で高校生と本音で語り合う授業を展開している特定非営利法人である。平成 30 年度においては、長崎県立松浦高等学校においても、カタリバの授業が実施された。

(11) マイプロジェクト（通称「マイプロ」）とは、全国高校生マイプロジェクト実行委員会が主催し、ＮＰＯ法人カタリバが運営事務局をつとめる探究学習プログラムのひとつで、文部科学省や日本ユネスコ国内委員会も後援している。マイプロジェクトアワードとはマイプロジェクトの実践発表会のことで、最優秀賞には文部科学大臣賞が授与される。今年度の全国大会は、平成 31 年 3 月 27 日～29 日に東京で開催される予定。

2　生徒アンケートにみられる成果

○「そう思う」「ややそう思う」の割合

	生徒アンケート項目	割合(%)
(1)	社会や地域、身の回りの問題について関心が高まった。	９２
(2)	社会や地域、身の回りの問題について、その原因について考えることが増えた。	８９
(3)	バラモンプランは楽しかった。	８８
(4)	よりよい課題研究のテーマとはどのようなものか答えられる。	７９
(5)	バラモンプランのテーマと「問い」について、インターネットや図書館を利用して必要な情報を集めることができた。	９２
(6)	バラモンプランの「問い」を検証するためのアクションができた。	８５
(7)	アクションを発表するために表現したり、評価することができた。	８７
(8)	バラモンプランを通して、班員や地域の方など様々な人と対話や協力ができた。	８７
(9)	自分と違う考え方の人の意見も聞くことができる。	９２
(10)	五島市など社会のことを知ることができた。	９１